



設定

父の大学時代の同級生兼子の上司 × ノンケ父子。

本編では、主人公義孝が年収 2000 万円越えの大手企業に就職。その『先輩の命令は絶対』という社内文化の中で、上司になった船橋に従っているうちに自分を失い、最終的に船橋の恋人兼便器とされ、いいように使われたところで物語は終わっていました。

番外編では義孝の父である孝介を主人公とし、息子を船橋から助け出すために父親が奮闘し、おとされていく展開です。

鞭、拘束、父子相〇、輪〇、羞恥露出、種壺、嫉妬煽り等

15000 字程度の作品で、画像のみ AI を使用しています。

登場人物

伊藤 義孝(いとう よしたか) 22 歳 新卒

体育会系出身。率直で、楽天的。

伊藤 孝介(いとう こうすけ) 45 歳

義孝の父親で船橋の大学時代の部活の同期。時には厳しいが、怒鳴ることはなく、穏やかな性格。

船橋 正幸(ふなはし まさゆき)45 歳 課長

義孝の父の友人で義孝の上司。粘着質な性格。

執着

船橋とは、学生時代の水泳部で同じレーンを泳いでいた仲だった。特別仲が良いわけでもない。ただ毎日のように顔を合わせる。部活という閉じた空間の中で、自然と知ったような気になってしまう関係だった。

そして2年になったある日、船橋に呼び出された。人気のないプールサイド。水音だけが響く夕暮れ。

「好きなんだ」

突然の告白に、孝介は言葉を失った。けれど、船橋の真剣な表情は嘘ではないとわかった。だからこそ、義孝も誠実に断った。曖昧にせず、期待を残さず、真正面から。

だが、それ以降船橋のボディタッチが、妙に増えていった。

肩、背中、腕、昔ながらの極小のVパンの尻の食い込み……無邪気を装っているが、指の動きがどこかいやらしい。まるで「諦めていない」と言っているようだった。

卒業後の同窓会でも、二人きりになると再び告白された。結婚してからも連絡は続き「気持ちだけでも受け取ってくれ」「会うだけでいい」……そして、しまいには「金を払うから一度だけお前とやらせてくれ」と、常識では考えられない言葉まで口にし始めた。

連絡をたつことも考えたが、同窓会に行けば会わないわけにはいかないし、部活を4年間一緒に頑張った仲間を無下に切り捨てることはできなかった。

しかし、突然、船橋からの連絡が途絶えた。

心のどこかで安堵している自分がいたが、しばらくすると、今度は息子義孝の就職のことで連絡が来た。船橋が勤める大手企業への推薦。願ってもない話だった。受けるだけでも経験になる、新卒なら誰だってそう考える。当初は孝介も前向きだった。船橋もきっと変わっていると……。

だが、いざ内定が決まった瞬間、不安が胸を締めつけた。あの粘着質が、息子に向かったら……。

その予感、残酷なほど当たった。就職して数ヶ月が経つ頃、義孝と連絡が取れなくなった。義孝の家を訪ねても反応がない。

不審に思って船橋に連絡すると、不自然なくらい親切に答えた。

「俺がきちんと“管理”しているから、安心していい。今は親には会いたくないそうだ」

胸の奥がざわつく。なぜ“管理”なのか。なぜ息子本人と連絡が取れないのか。それから義孝を心配し、連絡をとっていると、船橋から義孝と付き合っていると告げられた。信じられない思いで食い下がると、船橋から数枚の写真が送られてきて、そこには、常識では考えられない格好で、ペニスをびくつかせて嬉しそうにしている義孝の姿があった。

「あいつも幸せそうだろ」

その文面を見た瞬間、孝介の手は震えた。怒りか、恐怖か、絶望か……それ

すら分からない。

ただ、必死に頼み込んで、義孝と会う機会を作ってもらった。そして指定された日に義孝の家に向かった。

そこで見た光景は写真で見たものよりも生々しくて、残酷だった。息子が、船橋のペニスを上下の口でくわえこみ、体をびくつかせ、喘いでいる姿。船橋に中出しをされて、うっとりしている姿。確かに幸せそうだが、どこか洗脳されているような様子で、息子は自分の言うことよりも船橋の言うことを聞く……息子をとられてしまったかのように感じた。

見るに絶えず、その場をあとにした……。

それから息子を船橋から解放するために、再度船橋に連絡をとったところ、船橋が出してきた条件は『自分の命令にさからわないこと』だった……。